

シリーズ 中学校武道

授業の充実に向けて ⑥1

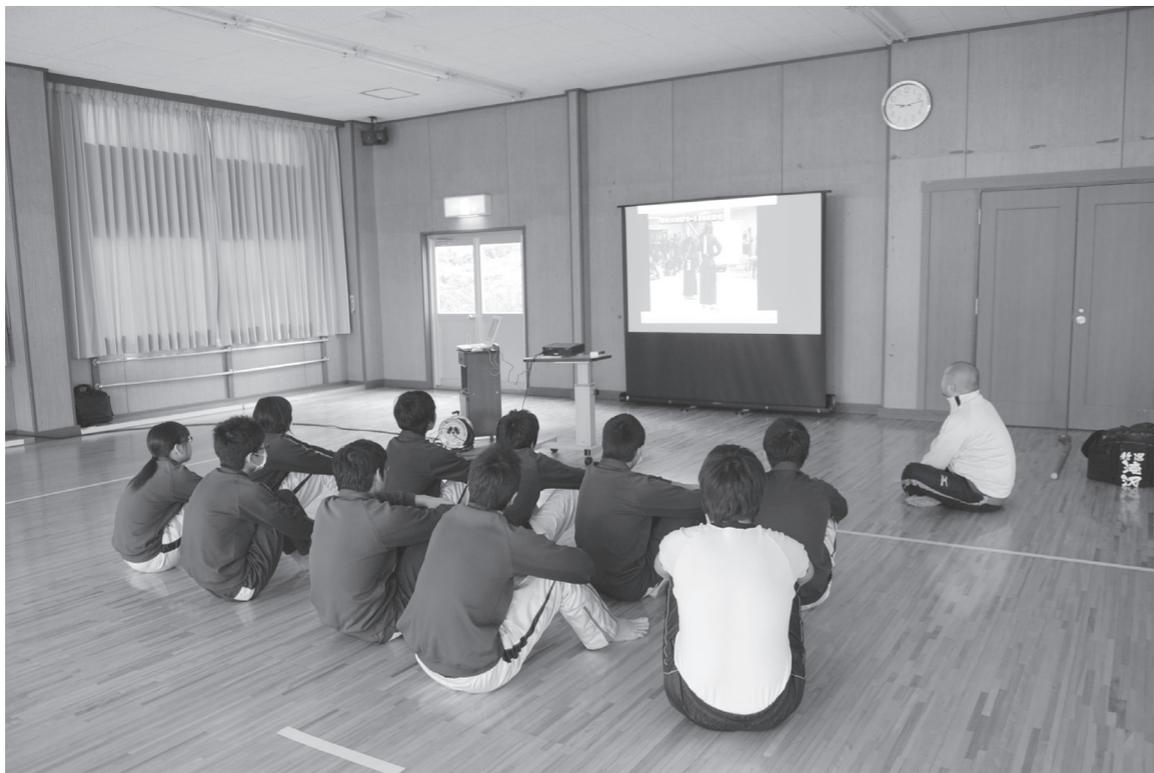
安全で楽しく効果的な指導法 銃剣道

公益社団法人 全日本銃剣道連盟

銃剣道は、突き技のみで行う武道であるため、技の動きだけを見ると非常に単純である。授業では、この単純な動きの技を飽きさせずに楽しく学ばせることを通じて、相手と呼吸を合わせて動作を揃えることや、相手が突きやすいような受け方をすること、長い木銃を使うことで、相手との間合いや周りの人のことも考えることも学習目標としている。

現在まで、中学校授業での実践例がなく、日本武道館と共催で過去3回行った指導法研究事業での模擬授業から、特に安全面に時間を掛け、慎重に研究討議をして、遅ればせながら現在、『指導の手引』の作成を進めているところである。

今回は、指導法研究事業での研究討議内容や『指導の手引』に掲載予定の「楽しみながら安全に銃剣道が学べる指導法」について述べてみたい。



銃剣道の試合映像を見せて、興味を引き出す

1 導入段階における指導

銃剣道は他武道と比較して、中学生が普段目にする機会が少ないため、導入段階では次の5つの点を指導し、銃剣道に対しての関心を持たせる。

① 生徒の武道に対する興味を引き出す
・知っている武道種目は何か。

・武道と聞いて思い浮かぶことは何か。
この2点について、プリントに記入させる、またはグループごとに発表させるなどして、生徒の武道に対して持っている意識、イメージを把握する。

② 銃剣道のイメージを把握する
銃剣道の試合映像を視聴させて、銃剣道に対するイメージを同様に把握する。試合映像は、「痛そう」「つらそう」といったネガティブなイメージを持たれる可能

性もあるが、銃剣道に対する興味を引き出すには、技を出すまでに様々な体さばきを行いながら、突き技を決める銃剣道本来の魅力を見せることができる試合映像が効果的と考える。

③ 武具の歴史から銃剣道の歴史に触れる

武道には、武具を用いて行うものと、武具を用いずに行うものがあることを理解させたい。鎌倉時代から江戸時代後期までの、刀、弓矢、薙刀、槍、火縄銃といった武具を紹介し、現代の銃剣道に発展していった歴史に触れさせ、銃剣道に対する興味を引き立てる。

④ 銃剣道の用具を紹介する

銃剣道で使用する用具と、その用具をどのように装着し、どこを突けば有効（一本）となるのかを紹介するとともに、突かれても痛くなく、安全であることを意識させる。また、「触れてみたい」「着けてみたい」という意欲を湧かせる。

⑤ 礼の意味、礼法を指導する

銃剣道の授業では、技ができるようになるためには、指導者の教えを守り、相手と助け合いながら協力して学んでいくことが必ずある。そのため、指導者や相手と一緒に学んでいる者を尊重して礼をするという意味を理解させたい。正座、座礼、立礼の方法を説明し、実際にペアになり相手と向かい合って行わせる。

あわせて道場に入場する際に「懸命に行うことを誓い、ケガや事故のないようお願いします」「今日もケガや事故なく学ばせていただき、ありがとうございます」という心を持って礼を行うことや、脱いだ靴を揃えることなども指導する。

これらの礼法や日常生活のマナーは、家庭や武道授業以外の場でも行えることであり、習慣として普段も自然に行えるように指導していかねばならない。
また、正座の実践に関しては、膝に故障を持つ生徒の有無をあらかじめ把握し、正座ができない生徒に対しての配慮が必要である。



新聞紙を突く



足さばき演技

と協力して行えるとともに、他の人がやっている姿を観ることができ、指導方法を取り入れた。



ボールを突く

②突き方の指導(表2) 銃剣道の授業では、1・2年生は用具を装着せずに形を行うため、相手の身体を直接突くことはない。当初は物を突くことを、授業の中に入れていなかったが、1回目の指導法研究授業で体験した中学生のアンケートに「実際に突いてみたくなった」という意見が多かった。これを踏まえて、生徒の「突いてみたい」という欲求が体育館や道場の壁を突くなど危険な行動とならないように、新聞紙やボールを突いて感触を体感させる指導を取り入れた。

表3

学習内容	学習活動	指導法
打ち払い	右の打ち払い方	①3人組になり、打ち払う人を④、打ち払われる人を③、④が右手を出す位置を示す人を②とする。 ②④と③は、向かい合って構える。②は④の右側に立ち、④の左手の位置に手を出す。 ③④は、右手の指が②の手に当たるところまで出す。 この時、④の木銃の先端が③の右の肩の方向を向いている。 ④④は、出した右手を構えの位置に勢いよく戻しながら、③の木銃を打ち払う。 ⑤④③を交代しながら行う。
	左の打ち払い方	①3人組になり、打ち払う人を④、打ち払われる人を③、④が右手を出す位置を示す人を②とする。 ②④と③は向かい合って構える。この時、④は③の左肩に木銃を向けて、③は構えの高さよりやや低くし、互いに相手の木銃が左側にあるように右の払い突きの時と反対の交差にする。 ②は④の右側に立ち、④のへその位置に掌を下に向けて出す。 ③④は、右手の甲が②の手に当たるところまで出す。 この時、④の木銃の先端が③の木銃に当たっている。 ④④は、自身の木銃が③の木銃に当たったらすぐに出した右手を構えの位置に戻す。 ⑤④③を交代しながら行う。

楽しく効果的な指導方法 2

先にも触れたように、銃剣道は突き技、足さばきともに単調な動きであるため、指導においては、飽きないように様々な工夫が必要となる。

ここでは、中学校武道授業指導法研究事業において行った楽しませながらの足さばき、突き方、打ち払い方の指導方法の例を紹介してみたい。

①足さばきの指導(表1)

銃剣道の足さばきは、すり足を使う。武道を行っている生徒でない限り、裸足ですり足を行った経験はないであろう。生徒たちには裸足でのすり足に早く慣れてもらう必要があるが、ただ単にすり足の練習を行うのでは動きが単調なため、飽きられてしまうおそれがある。そこで、足さばきで行うラリーや、グループごとの足さばきの演技を行い、楽しみながら仲間

表1

学習内容	学習活動	指導法
足さばき	送り足リレー	①全体を2～4グループ程度に分けてコースを決める。 ②タオルや丸めた新聞紙で構え、それをバトン代わりにして、送り足でコースを通るリレーを行う。
	グループごとの足さばき演技	①送り足、開き足の方法を理解させた後、下記のとおり、順に送り足、開き足を組み合わせて行わせる。 1 送り足 前 2 送り足 後 3 送り足 右 4 送り足 左 5 開き足 左 6 開き足 右 7 開き足 左 8 開き足 右 ②5～8名程度のグループに分ける。 ③各グループごとに1～8まで声を出して号札を掛けさせながら、グループ全員の動きが揃うように行わせる。 ④大きな声が出ているか、全員の動きが揃い、スムーズに行っているか、構えた木銃が上下に動いていないかを判定基準として、他グループの演技を審判し、自分のグループ以外から良かったグループを判定させる。

表2

学習内容	学習活動	指導法
突き方	目標物を突く1(新聞紙)	①3人組になって、新聞紙を横に広げて両端を2人で持つ。 ②綺麗に穴が開くように、広げた木銃の真ん中を突く。 ③3人で交代しながら行う。
	目標物を突く2(ボール・丸めた新聞紙)	①2人組になって距離を取る。木銃を持っている方を④、ボールを持つ方を③とする。 ②④の胸の高さに③はボールを軽く下から投げる。 ③④は③が投げてきたボールを突く。 ④交代しながら行う。

③ 打ち払い方の指導 (表3)

銃剣道は、基本的に右手を動かして長い木銃を使うことが重要となる。打ち払いも右手を動かして打ち払うが、初心者は強く打ち払おうとするあまり、木銃が当たる部分に近い左手で打ち払ってしまいう傾向がある。そこで1人を補助として3人組とし、右手を使うことを意識させる指導方法を取り入れている。



払いを行う際に右手の位置を補助する

3 安全指導

安全指導に関しては、特に次のことに留意して指導を行わなければならない。

① 用具を装着していない相手に向かって突くということ
 まず、授業では、用具を装着せずに、相手と協力しながら、形を行うことができるようになることが目標であるということとオリエンテーション時にしっかりと説明



左の打ち払いの補助

をする必要がある。『指導の手引』には安全面を考慮し、授業の銃剣道として、従来行っている銃剣道とは、以下の点を変えて掲載することになっている。

- ・ 木銃の交差を離す
 お互いに構え合う場合、双方の木銃が10cm交差するが、授業では、木銃の先端が触れる程度とし、従来より10cm離れて構えるように指導する。

- ・ 授業用の形に改良

1学年では形の1本目、2本目が、2学年では5本目、6本目ができるようになることを学習目標としているが、安全面の考慮から全日本銃剣道連盟が制定する形を授業用に改良している。

具体的には、本来突きを受ける側の打方は、相手(仕方)が突いてくる際には下がらないが、授業では大きく下がらせ、相手の突きが当たらないように受ける動作をさせる。

また、形の2本目(1学年で実施)、6本目(2学年で実施)は、従来の銃剣道の形では脱突という相手の押してくる木銃を外して裏

側(突かせる側の左側)を突くという技を行う。授業では木銃の交差を離すことから、相手の木銃を押し外したりできないため、突かせる側が最初から裏側を開けて、外した状態にしたうえで突かせることにしている。

② 木銃の取扱い

166cmという長い木銃を使用することから、練習以外では突く動作を行わないこと。木銃を持って移動するときは、横に持って移動せずに、必ず木銃を立てて持って移動することを約束させる。

③ 木銃の打ち払い

2学年では、形において相手の突きを打ち払って突くという応じ技を行う。形を行う際は、号札を掛け、それに合わせながら動作を行い、相手と呼吸が合うようにしているが、前に出て突いてくるものを打ち払うので、前に出過ぎて間合いが近くなると突きが相手の身体に当たってしまったり、相手の手を打ち払うなど、事故につながる可能性がある。



用具を着けた本来の交差



授業での離れた交差

④ 目標物を突かせる際の留意点

指導者は、毎回の授業で繰り返し間合いについて注意喚起を促し、払われる側は「前に出過ぎない」「払われたら必ず下がる」ということを徹底して指導する必要がある。

生徒同士でも相手が近づきすぎと感じたら、技を行わないようにすることを繰り返し指導するとともに、指導者が危険と感じれば、木銃が触れ合う程度のところから更に距離を離して行わせるなど工夫が必要である。

前項の楽しく効果的な指導法の中で、新聞紙やボールなどの目標物を突くことを例として挙げた。目標物を持たせて突かせる場合は、その持ち方や立つ位置などをきちんと指導したり、生徒同士で考えさせる指導が必要である。

また、ボールを突く際は、突いたボールがどの方向にいくかわからない。突いたボールを取りに行くと際には、周りの状況に細心の注意を払わせなければならない。楽しく遊びの要素を取り入れて行う

4

まとめ

練習は、緊張感が緩むところでもある。特にボールを突く場合は、隊形なども十分に留意して行わなければならない。

武道経験のない生徒に対して、銃剣道経験のない教員が安全に授業を行えるよう、指導法研究事業において討議してきたが、2学年時の応じ技は、学習内容の中で最も安全面での注意が必要などところである。『指導の手引』作成までにこの2学年の応じ技の指導を、必ず模擬授業で試さなければならぬと考えていた。

これまで行ってきた模擬授業では、参加した中学生に銃剣道の認識がなく、1学年の内容から行わなければならないが、2学年の学習内容を実践することができずにいた。そのため、手引きの作成に時間を要してしまった。

しかし、昨年12月の指導法研究事業において、1学年の内容と2

学年の内容を混ぜた形ではあるが、実際の中学校の体育教諭に2学年の応じ技の模擬授業を行っていただいた。研究者として参加した教員の方々からも活発に意見が出され、懸案だった2学年の応じ技の指導法がようやくまとまった。これで、『指導の手引』の完成に大きく近づいた。しかし、銃剣道は中学校保健体育教員の経験者が少ないこと、更に銃剣道一般に対する認知度不足から、実施校の獲得に苦戦しているのが現状である。

指導法研究事業に参加した中学生のアンケートでは初めて行う銃剣道に苦戦しながらも、楽しみながら体験してくれていることが窺える。

当連盟では、中学校での銃剣道授業の実現が悲願である。『指導の手引』の作成を機に、数多くの教員に興味を深めてもらい、1校でも多くの中学校が、銃剣道を通じて武道のすばらしさを感じてもらうことを望んでいる。今後もしっかり強く継続して普及PR活動を進めていきたいと考えている。